

## 「ナホルの子孫」

2021年02月10日

これらのことの後、アブラハムに次のような知らせがあった。「ミルカもまた、あなたの兄弟ナホルに子どもを産みました。長男のウズ、その弟ブズ、アラムの父ケムエル、ケセド、ハゾ、ピルダシュ、イドラフ、ベトエルです。」ベトエルはリベカをもうけた。ミルカはアブラハムの兄弟ナホルにこれら八人の子を産み、またレウマという名の側女も、テバ、ガハム、タハシュ、マアカを産んだ。(創世記 22 章 20 節～24 節)

イスラエル人は系図を重要視する。自分の系図を明らかにすることによって、自分が誰であるかを表明できるからである。イザヤは「アモツの子イザヤ」、エレミヤは「ヒルキヤの子エレミヤ」と書かれ、預言者たちには父の名が添えられている。父、祖父が誰であるかを語ることによって、自分の身分、素性を明確に表すのである。これは、男系の家柄を誇ることでもある。嫡男、長子が最も優遇され、側女の子どもたちの身分は低いところに置かれたままであろう。女奴隷ハガルの扱われ方を見れば、明瞭である。

マタイ福音書では、主イエスの系図をアブラハムから始まり、42代目のキリストまでを繋げている。ルカ福音書は、主イエスの父となったヨセフから、さかのぼりアダムの神話の系図にまで至っている。ヨセフがダビデの家系を継いでいたのかという点で、ダビデ家の末裔が北方のガリラヤの大工をしていただろうかという疑問を持つ。ダビデ家を継いでいる者なら、都エルサレムに住み続けたのではないかと思うからである。系図は権威づけるために創作したものが多々あっただろう。主イエスの弟子たちは、ヤコブ、ヨハネ兄弟は「ゼベダイの子ら」と記されているが、他の者たちは先祖の名を上げていない。ヤコブ、ヨハネをも含め、皆、無名の庶民であったということである。パウロは「ベニヤミン族の出身(フィリピ3:5)」と言って、ベニヤミン族に属していることを誇っている。

アブラハム物語の中に、系図が二度書かれている。アブラハムの父テラは、アブラハム、ナホル、ハランの三人の男子が与えられている。アブラハムの妻はサラで、神の約束通り、独り子イサクが生まれた。神の祝福の基である。

アブラハムの弟ナホルは、弟ハランの娘ミルカと結婚している。伯父と姪が結婚している。古代には血縁のある者の間で結婚しているケースが多い。ナホルとミルカの間には、長男ウズ、その弟ブズ、アラムの父ケムエル、ケセド、ハゾ、ピルダシュ、イドラフ、ベトエルの八人が生まれた。ベトエルはリベカをもうけ、リベカがアブラハムの独り子イサクと結婚する。イサクはベトエルとは従兄弟同士で、リベカは従兄弟の娘となる。リベカとイサクの間に「イスラエル」と言われたヤコブが生まれ、アブラハムに告げられた約束は揺るぎないものになって行く。また、ナホルはレウマという名の側女にテバ、ガハム、タハシュ、マアカの四人を産ませている。彼は12人の子どもを持つ有力者になっている。かつて、子どもを沢山持つこと、大きな人口を擁する民族になることが神の祝福に与ることを意味し、勢力を誇示できた。

テラの三男ハランは、ロトとミルカを得たが、年若くして、カルデアのウルで亡くなった。父のいないロトは、アブラハムと一緒にカナンに同行し、彼の庇護の下で成長した。ロトは二人の娘を通して、モアブ人とアンモン人に繋がったと記されていた。ナホルの子孫について短く書かれているが、次のイサク物語が始まるに際して、イサクの妻になるベトエルの子リベカを登場させる序章ではないか。